



お問い合わせ

Feb 2021

立教セカンドステージ大学(RSSC)事務室

E-mail: rssc@ml.rikkyo.ac.jp TEL: 03-3985-4672

学びは理想実現のために 立教セカンドステージの伝統として

RSSC 教員

立教大学名誉教授

渡辺 信二



シニアにはシニアの責任があります。例えば、現在の日本で、優先すべきはコロナ封じ込めか経済活動か、と議論していますが、人の命は地球よりも重いというのが日本政府の伝統的判断でした。今の政権が経済活動を優先すれば、Go To トラブルでしょう。むしろ、人と環境を大事にするにはどうするのか。高校時代、もう 50 年以上も前で若気の至りでしたが、そもそも人類がこの地球から消えれば良いという意見も出ました。環境保全の観点のみから言えば、正論でしょう。でも、シニアの議論は、人類を含めた森羅万象全てを尊重し生かす理想論であるべきで、そのためこそ、ほんとうの現実論であるべきです。

毎日、コロナの感染者数・死亡者数が発表されますが、人の苦しみや人の命が数で理解できますか。GDP で幸福度が測れますか。数で現実を理解するとして、では、算入基準や算入日などに問題はないか、改竄・改変はないか、自宅待機者の死を加えているか、コロナが理由の倒産や自殺者の数はどうなのか、・・・。

シニアこそ、ミドルやジュニアとは異なる、先を見据えた視点や構想を示し、議論を先導すべきです。そのためには、まず、日々生き生きと思考し活動することでしょう。縁側で日向ぼっこは、まだ先の話です。

学びのヴィジョンは見えています。理想はそれぞれ違うでしょう。ただし、目標まで 100 歩だとすれば、99 歩を半ばとする努力が求められます。辛い面もあるでしょうが、RSSC にはともに歩める仲間がいます。

RSSC の一年 初春の課外活動

1 月下旬には大学の秋学期授業期間が終了します。例年、「2 月 3 月の修了までの貴重な時間を少しでも有意義に過ごしたい」という受講生の声が RSSC に届いていたこともあり、その学習意欲に応えることを目的とした、**自由参加のプログラム「初春の課外活動」**がここ数年企画されるようになりました。

ここでは、RSSC 講師の企画・案内による多彩なプログラムが実施され、施設の見学や講義、実践などを通して、幅広く体験学習ができます。

例えば、「冬のカモ観察会」は、東京上野不忍池にて、きれいな衣装に生え変わったオスカモを実際に見ながら、教員の解説を聞いたり、手軽な都内の鳥見ポイントを教えてもらうことができます。他に、「立教大学原子力研究所見学会」では、原子

力研究所（2001 年に原子炉停止）の沿革や放射線の基礎など講義を聞いた後、実際に廃止措置中の原子炉施設見学、放射線の測定実験・敷地内見分を行い、参加者からは、貴重な体験ができたとの声が上がっていました。

2020 年は残念ながら中止になりましたが、他に新しく、「哲学堂公園見学会～ヴィジュアルに哲学する～」「古代オリエント博物館見学会」「日本近代史の足跡を訪ねて～雑司ヶ谷霊園とその周辺」、また気功実践を行う「セカンドステージを楽しむ詩心・気心」のプログラムが企画されていました。

2021 年についてはオンラインを活用し、コロナ禍でも受講生の皆さんの学習意欲に応えられるようなプログラムを検討しています。次回は、「修了式・修了パーティ」を予定

RSSC 事務室から、キャンパス便り

現在は、ソーシャルディスタンスを取って、利用していただいています。

RSSC 事務室と同じフロアに、**RSSC 受講生・修了生専用のスペース、受講生ラウンジ**があります。PC やプリンター、コピー機、ロッカーなどが備え付けられています。授業の前後の時間に休憩に立ち寄り、受講生委員会活動に利用、また PC を使ってレポート作成をするなど、皆さん、受講生ラウンジを有効活用されています。



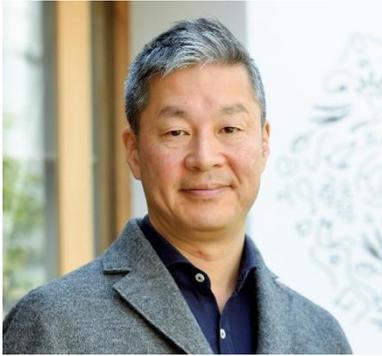
鈴懸の径

鈴懸の径は、キャンパスの中央を東西に続くスズカケ(プラタナス)の並木道で、1924年に東京・麹町のローンテニス・クラブの庭にあった若木が寄贈され、植樹されました。故・灰田勝彦氏(立教大学経済学部卒)が歌った昭和のヒット曲『鈴懸の径』のモデルであり、歌碑も建てられています。

スズカケノキ(小アジア原産)、アメリカスズカケノキ(北アメリカ東部原産)、それにモミジバスズカケ(両者の雑種)の3種が混じって植えられていて、春の新緑、秋の黄葉など、季節ごとに美しい姿が見られます。



人生100年時代の幸福戦略としての「暮らしの場」づくり！RSSC 教員 甲斐 徹郎



皆さんは、自分が住んでいる「暮らしの場」をどのように見直すべきか？と問われたらどのように答えますか。

この問いに対してよく聞かれる答えは、「将来に備えてバリアフリーへの対応を検討したい」といった内容です。そのことを考えることは確かに重要ですが、残念ながら私の授業ではそうした要望に応えることはありません。

授業のテーマは、住まいを「暮らしの舞台」として再構築することです。

それがテーマなのですが、これまでの受講生に、「暮らしの場をいかに見直すべきか？」と問うと、暮らしの場に対する皆さんの意識は薄く、特に現状を変える積極的な姿勢は見えてきません。

「人生のゴールデンタイム」ともいえるセカンドステージを有効に活かすために、自分がいかに「外に出て」、「外と出会い」、「外と関わるか」というような「自分」と「外」との関係の再構築が重要で、「内」なんかに籠ってられない、というのが大方の共通した意識なのだろうと思います。

そうした皆さんに「暮らしの場」を整えることに向かい合っていたのが私の授業ですが、そうしたことがなぜ重要なのか、その理由を3つ挙げておきます。

1. 健康長寿のための基本条件を整える

熱的快適性の低さが健康被害を及ぼしているということが医学的に指摘されています。住まいの熱性能を見直すことは健康長寿のための基本条件といえます。

2. イベントではなく日常を大切に

「暮らしの場」を伴わない「自分」と「外」との関係づくりは、継続性が低くイベント的で消費的な行為になりがちです。住まいを整えることは日常の暮らしの質を高めることにつながります。

3. 関わりを堆積させる

最後に挙げたこのことはとても重要で、意味することはセカンドステージで得た体験や関係を一過的に終わらせないということです。そのために、自分の活動に対して拠点となる「場」を与えることが重要となります。そうすることで「場」に経験が堆積し、暮らしは時間軸の中で発展し続けることとなります。

「住まいを見直すと人生が変わる」、それは事実です。それほど住まいは人生に大きくかかわっているということでもあります。

人生100年時代にセカンドステージに突入した皆さん！健康で幸せな人生をデザインするために、その戦略としてとても重要な「暮らしの場」のあり方を検討していきましょう。



<教員専門分野>
環境・コミュニティデザイン
RSSC 担当科目名
「セカンドステージの
住まいづくり」

教員著書
新建新聞社
(2018/4/27)



リフォーム事例
築45年の木造住宅を改修。断熱性能を見直し、快適でひとの集まる暮らしの場が整備された。(参考書籍:「人生を変える住まいと健康のリノベーション」より)